



特 18
門 録 録
號 459
卷 2



重修真書太閤記初編卷之四

筑阿弥日吉丸と相とる事

并日吉丸松下嘉兵衛小見ゆる事



去程^{きり}又^{また}多賀^{たが}の順光^{のり}坊^ぼ小^こ從^まひ日吉丸^{のり}ハ東國^{とうこく}小^こ趣^まま
 々^ま色^しば五郎^{ごらう}作^{さく}も志^しむ^かか^がく安堵^{あんどう}せ^しに母^{はは}と又^{また}
 却^{かえ}るその行末^{ゆきすま}と案^{あん}じ出立^{でだて}し日^ひよりとや歸^{かへ}るづ^き
 日^ひを數^{かず}つ^つ待^{まち}るび々^びふ筑阿弥^{ちくあみ}を更^{さら}に何^{なに}とも言^い
 ふ^まか^か母^{はは}あま^まり小筑阿弥^{こちくあみ}が善惡^{ぜんあく}を法^{はふ}茶^{ちや}とり合^あぬ
 夫^{おとこ}と成恨^{なりがみ}をかこら^られ^れば筑阿弥^{ちくあみ}母^{はは}小語^{こご}るや^や日
 吉丸^{きちまる}ハ生^{なま}る^る時^{とき}乃^{すなは}瑞相^{ずいさう}といひを^をづ^づ尋常^{じんじょう}の子^こ供^{ども}

重修真書
太閤記初編
卷之四
筑阿弥日吉丸
松下嘉兵衛
小見ゆる事

と同一の如くは氣隨ふとて惡事をなす人より
好物を貰ふとて悦もせず我手の物を人よ望
まねく吝惜とて彌助國吉乃大願乃旨趣も兼て
よを聞傳へしともありし我の願日吉九身小
應むる形も人よは我の教訓あふせん又
天地神明擁護のまを廻らされん如何
ある深山幽谷に捨置とも虎狼豺象かつり彼が
輔とあるづく霧海風濤に漂ふと鯨鯢鮫龍の屬
鱈を振ひ鱗と張て送り近づくさし聊も氣遣
くしきと形も正しく御より産小臨し日の瑞
相すの懐胎のはじめ乃靈夢小應むる所ある

我ら此の如くは聞保らるる疑ははるるや身小
受し示現とてやくも忘るるや但此こと穴賢人
よか漏しむいと秘密小教訓しけせば母も實と
ありし直しその如く日吉九が言ふも然
る小筑阿弥年老行歩も不自由なれば婿よりて家
を譲り身を安樂と過んこ海東郡乙子村乃長尾
某が子成呼むる日吉九の姉乃今年十七歳小か
るよ配し弥助吉房と名乗らせり
流布本小を弥助昌吉入道して筑阿弥と稱すと
あり然れども秀吉出生記とてむめ當時の記録
るる秀吉八歳小く父木下弥右衛門を喪し母

大月己の編次

ハ信秀乃同朋筑阿弥ニ再醮ト云小依ク此條
ヲ刪正ト又流布本小婿乃弥助ト國高根村の者
なりトあり國高根村ト云地名定リ形ク尾張
名勝圖會ニ長尾武藏守吉房ハ知多郡大高村人
ト云然トモ乙子村貴船社の棟札ニ奉造立貴
船大明神社頭者依為當関白様秀次公御氏神御
父三位法印為御願御神體ニ並咒同金殿玉樓之社
頭悉皆御造營成就畢仍撰嘉辰貴開眼供養法儀
給誠如依信力甚深神德嚴重而守護御武運長久
當其運遷宮之導師者長沼萬德寺良秀法印于時
三位法印之代叅飯沼半三郎殿盛勝于時天正廿

年壬辰九月廿八日トモ秀次公御氏神ト云ば
此地小誕生何リト必セリ然ラバ三位法印も
乙子村乃人ト云ル人
此弥助吉房後小右馬允久吉ト号シ從五位ト武
藏守小任シけるガ多病なりト云ハ雜髮ト法印
小任シ一路ト稱モ二代関白秀次公乃實父なり然
モ日吉丸ハ順光坊ニ從ア三州路より遠州路ニ
カキ道ト札ト配リテユカガ城主領主乃
分限より人數の多少を伺ヒ要害の善惡を考ヘ且
貴賤の品格をさへよく辨ヘ知ク尋常比下人と
あかトカク縁を順光坊も調寶ニあり悦ビ巡

大目録の補記

行々終々遠州濱名に至り但遠州々今川義元
乃領分りて名立る勇士多きふ濱名は松下
源太左衛門尉長則と云ものあり

流布本加兵衛尉之綱は作ふ今松下家譜小考
之綱は慶長三年二月晦日六十二歳ふく卒は
と云ば天文六年丁酉北生ふく太閤より一歳少し
之綱乃父を源太左衛門長則と云天正十八年三
月十五日七十八歳ふく卒はとあり太閤十五歳
乃天文十九年の長則卅八歳之綱十四歳なり因
て改て長則は長則は佐々木源三秀義乃嫡子
太郎左衛門尉定綱の四男四郎左衛門尉信綱の

三男佐々木六角壹岐守泰綱の三男壹岐左衛門
尉長綱乃孫九郎左衛門尉高長三州碧海郡松下
郷小住し松下の佐々木と稱は是松下氏の祖
高長より六代源五郎長尹と云即長則乃父なり
長則弱年より槍をよく遣ふと云を以て諸國を
經歷し北條武田乃家小歴仕し今川家小仕
ふと云此年今川義元三十二歳あり
軍學に達し兵法の奥義に通ふ今川旗本の謀主と
して千五百貫を領知せり
當時乃貫高明了小解せしものを見れば然とせも
天文十二年二月の多門院日記に米五斗代四百

十二文とあり然きは千五百貫文のみを米千八百
 廿石三斗八升余を得へし又甲信乃法は一石を
 百十二文と定むる處あり千五百貫文ハ一万三
 千三百九十二石八斗五升余に當る之綱の代は
 天正十五年三千石を加えらる同十八年十月遠
 州久野一万六千石被賜ふと云ふ據ハ一万三千
 石余ハ本領とらる如し
 順光坊松下とは年来師壇の好厚ありと云ふによて
 一兩日逗留せしきり々る内日吉丸が容貌猿小似
 る心際の尋常ありぬとありひる笑ひありひハ嘲
 罵けるを松下の妻と之綱と云ふを聞く呼出して

其の體配を見るは只者ありばかきとれしは終
 じ長則も召出し何國の者ぞと問は尾州愛智郡
 中村乃生と答ふる音聲なりと云ふはやふ然
 も大音なり年ハ何許と問は十五歳と答ふ爰に留
 りて我家はあはば武士と取立んと云日吉大に喜
 び年来の所望ふはと云ふ我儘なる生質あり親類
 も持あまし此度順光坊の伴は下りて隙明次第御恩
 留りては事關と存ひ今も過る隙明次第御恩
 ぶりけり云長則も左も有べし能く勤く後
 歸り来よと約束し順光坊と共に駿河國へ趣きぬ
 日吉駿河に至る今川家の大身小身残らば巡行し

ておの家風を料簡して、順光坊は、あきより近江へ引返す。再度遠州濱名に至り、松下小對面。實は日吉丸を扶持し、あきと問長則。いゝ小も留置せし。扶持を加へ、いゝと云ふ。因て即日吉丸を松下が許し、残し留め、順光坊は上り、下り日吉を留め置まげ之綱が弟の九歳ある友次郎と云ふ男子乃傳となし、心次第小遊せ置たり。流布本之綱乃子九歳なるとあり、然れども十四歳の之綱といふ。九歳の子あるべき依て弟と云ふ。

日吉丸辨舌利口ゆゑ面白く、癖しけふより子供

女子輩を引替能者ありと悦び、愛しけり。松下ハ若侍と呼集め、太刀打槍合など為させ、夜ハ孫兵乃兵書を講むるを以て、平日の樂と云ふ。かゝ夜ハ次の間に出る軍談を聞え、怠りかゝ。又倦む。光陰流し、日吉丸十八歳に成り、長則の嫡子之綱十七歳、元服を加えける。序に日吉丸をも男ふなす。これ自ら藤吉郎と名乗りける。之綱我と共に元服したる悦びの驗ふと云ふ。脇差一腰を、あき藤吉郎と云ふ。我既ハ男と知りぬ。相應の役成勤め申す。草履取ふもせよ。此脇差もてハ用立

中すぐ今すこし金あぢ乃好を給りしやと申け
とば若き侍ども大に憎み主人の與えしものを不
足する法やある無禮なり氣隨之と叱る藤吉郎い
やとよ無禮と答め給ひや氣隨とな叱り給ひを
草履取とのい主人の伴ひ式臺の側まぐ進む者
なり萬一乃變あらん時主人と共に真先に手合
そのそり宜しき刀ふくても我の詮なるはべし
主と形り奴僕とな厚き因縁なり心おけりふと
いそし隠さずさふはと云之綱聞て尤なりと
て常ふ身を離たざりたる業物を一腰あし藤吉
郎大に悦びさて元服の時實名茂も付るとやらん

承りし某も何と申度と云之綱聞て何ぞ
思付し文字ありやと問藤吉郎それか父を
昌吉と申せば是は相應て付申度と云にあり之
綱さば父一字を取高吉と名告べしと云い
藤吉郎大に悦ひあはれより中村藤吉郎高吉と名乗
る松下家中の若者等うちよめて嘲り笑ひ多ふ
ハ實もよく名をば付し猿の如き振舞して高き
木れ上は有りおを取と告るべしと我とやけり
かたさしめふ身の如きや関白太政大臣迄
經上り玉ひ日本國いふ及む三韓大明の遠き
境小威名を轟く玉始と兼り知らぬと是非

もな

藤吉郎武術試合乃事

并松下加兵衛尉駿州出馬の事

中村藤吉郎高吉奉公の暇あきば太刀打の稽古場
 2至り見物せらると日吉丸と云い時乃如く松下が
 門人に川島宇一と云いのありその性血氣強盛よ
 して日頃傍若無人の振舞多かりしが藤吉郎が毎
 日誓古場み来ると怒りこは其方共の来るとさ
 處にあはば早立出よ但かのきも見物せり
 い習ひささ心あるあらんはもあは来と教く呉
 んすこしと痛さ目あも逢苦し死も凌がされ

バ我の藝に進むがごとと云藤吉郎いやと誓古
 仕とさ見物せらにあはば只心地よ死ものよ覺
 い故暇さあおるとき見物するもていと答ふ川
 島さやど見物せると好むうみ習と上手
 小至るべし我と立向稽古せよとま孫く藤吉郎
 さゆ辭退されむ川島弥勝よの臆病ある性根
 うか我の心あ我等が業を見物せると詮有早
 く立去る再度来るにあはばと云藤吉莞尔と打笑
 ひいり少と仰の如く修行せし先形をば勝ても負
 ても耻と似く耻とあはば併萬一拙者の木刀相手
 乃面上に當り疵あても付ては此上形と無禮とい

間試合の義ハ御用捨下されしと云川島大
 怒り汝が詞もかばご以て無禮なり已が臆病を押
 隠さんぐ為よ左様あると成言出と條ゆるし難し
 疵付ても苦しかりとまげ我を打くみよ我ハ強く
 打まじきなり是非みくとせさげくば藤吉郎此
 上ハ辭さづき詞か無礼ハ御免あるべいと云て
 誓古場に入川島おと一打一打と打を握て立
 んめおとと思ひくれバ二尺八寸の木刀を握て立
 向ふ宇市ハ大男め然も年来乃稽古なりあや
 藤吉郎打す急らとて片輪もやめん誤り打殺さ
 せやせんかゆさ成と云者も何りかさを飲

て見物を藤吉郎ハ小男め然も今日も免て木
 刀を取立む川島藤吉が眉間を打んと飛か
 うふ處を藤吉郎心得りと引と直川島が
 眼の上成をけと打りておむ處を付入
 持する木刀を打落はさて傍小向ひ勝負いりふと
 呼らりかば有合輩叔も仕りと思はば聲を上
 と譽せりなま川島大は面目を失ひ今一度とせ
 るるを藤吉郎その上にはま疵付中ても餘りふ
 氣の毒なり御免ゆくと言捨ふと退きくば宇
 市無念ふが疵付とまめ家と歸り所勞と
 称して人小面會せば

大隱言不經卷四

七

川島宇一と遠州豊田郡人と云然とごも其履歴
と詳おせば且今川家分限帳も載るとなり猶
後考成す

松下長則夜毎に諸士を集めて軍談をかくけるに
三四日川島宇一出来らば何故に不参するやと尋
ぬるハ風邪小依り籠居すと云長則云く風邪ハ輕
き病かかると捨置ても却り重病ありとあるをかく川
島が病體如何なる容體うと見届来るべしと
人を遣はしけしバ川島はむよ由り使と打連
て軍談の席に出長則さうどふもな死病を言とて
講席を闕と怠惰の至と怒りたれば松田源左衛門

側より強ら病氣小因り不参せしものよはるば此
間藤吉郎と試合して疵を受しと耻り籠居せしふ
ふべし全く俄我なりと取柄し多きは長則大驚
さ宇市の強勢乃壯士あり藤吉郎と對揚をべき者
にあはば疵を受しとは不審なり藤吉郎呼とて呼
出り汝川島と試合して彼者の面小疵付しと聞ハ
誠りと問藤吉いうふも相違なくその日の始終を
斯くと落ぬ語りしゆ長則奇特の事なり但我
家へ来らざる以前に習ひしとありも有やと問藤
吉郎答ふるや幼稚の間より人の誓古を見物し
獨工夫せし追ひて正しく人と打合しハ今度始ふ

て形りとも長則まらしく甘心し我自ら相手とあり
 試むべし打くみよとて立上る藤吉郎辱仕合形を
 と辭を形色なく立向ふ長則ハ多年の功者ふと共
 凡人ふらざる藤吉郎が心小練熟きし天真正の一
 乃太刀鋒むるとく打出上段下段乃勢電光より
 も速くふと長則稀代の手内形り此上ハ勝負
 を決するよ及むんこく立合を止め諸士小向ひ各
 よく聞給へ萬方ハ一心より修練と云とあり今
 の藤吉郎が人の誓古と見え心中小修練せしと云
 と同トあるべしと教訓ふ居ふ處へ川島宇一
 出来とり長則宇一を呼近付御邊藤吉郎と試合し

て疵を蒙りしと耻す所勞と稱し籠居せしハ大丈夫
 夫乃志はあはば藤吉郎が手の内勿く容易く勝を
 取難しと我さへかひひしが故ハ半途ありし刀
 止めり然るは御邊勝がとを知らず打合疵を
 受らむしハ自身を知らざるなり是より後よく先
 自身乃力を知し武學びあ敵を料し進むとは此
 と形りと孫子小所謂よく戦ふ者ハ勝るべき者よ
 勝と云理を盡して教導せしはあれよを後藤吉
 郎を恐ろし死者と招ひひし侮るものこそ形り
 こそはととも藤吉郎濱名よあると五年小及ぶと
 云ても出陣の沙汰形りこそは徒小兵法の講論を聞

保いのとみく花々敷働せしとぬく空敷月日と過
 けふと天文廿三年相州小田原乃北條氏康と今
 川義元と榊楯と及ひ氏康ハ関東八ヶ國の軍兵四
 万五千餘騎あゝ箱根をとせ越駿州へ亂入せんと
 聞ゆ今川方までも防戦の用意をなすべしと先
 駿遠參の兵を催促あり中ふ就く松下あは旗本へ
 參陣とせしと觸らるしふより長則父子出陣の用
 意をなす藤吉郎今度供と從ひ涯分乃働をなさん
 と望み々れ共何とく思ひ々ん松下あは許さば
 藤吉郎種々小所望をれ共只無用とのとありて既
 明日出立せんとは藤吉郎今ハ許容ありとく止

るべしにあはづばと思ひ定め石堂藤左衛門と云者
 古鎧一領か賜と云石堂元より藤吉郎を懇
 意小せしか子細なく古鎧を取出し貸與へ云
 今少し好を與えさくありとぞも松下が見
 う我の鎧を問はんと死買求めと答んは價の
 安さを似合しゆふと因て是を與ふるを見苦し
 さを怒るさかう授と云か藤吉郎大に悦び高
 紐を腹帯して松下が馬の前は畏る長則之綱是
 をと問藤吉郎石堂が教し如く市に買求し吉兆
 乃鎧と答ふ長則も今ハ止めぬ打連て出陣を

流布本小弘治元年のこくく繪本小弘治三年の
春こけ共よ誤るり天文廿三年正月より此取合
こくまほ氏康今年四十歳今川義元卅六歳松下
長則四十二歳之綱十八歳藤吉郎十九歳と知へ

重修真書太閤記初編卷之四終

重修真書太閤記初編卷之五

北條父子駿州へ亂入乃事

并小田原北條由來の夏

北條左京大夫氏康同嫡子相摸守氏政父子坂東七
州乃兵を發し今川と戦んて天文廿三年二月
中旬小田原を首途し駿州に押寄る
流布本弘治三年三月十四日小田原を進發しと
あり誤なり北條今川武田の和睦せしと天文廿
三年三月かしく今川氏真ハ北條氏康乃婿と成
北條氏政ハ武田信玄の婿と約し武田義信ハ今

川義元北女を聘し弘治二年乃春三家へ入與あ
 ずしと諸史にても然らば弘治三年三月北條今
 川乃合戦あるべし理那し依るべきを刪定は
 今川義元大久怒りて云々るる小田原の北條氏康
 と云は我祖母北川殿の父伊勢新九郎氏長入道早
 雲寺の孫なりさとは故修理大夫氏親殿との從弟
 我等との從弟違乃疎るふまどさ間がり形りあり
 のこなきは早雲寺入道と云を京都の奉公衆なり
 しが浪人志る東國へ下向ありしを我祖父故治部
 大輔義忠殿乃馳走ありし興國寺の城主とあさせ
 玉ひ故殿の加勢ありし故は伊豆國をも切從へ終

ふ相州をも打取しをかし始と云ば斯乃如し氏康
 我の孫として當國へ兵を差向る條とつきの外は
 不當形り冥加あふまどさなり急ぎ富士川まで出
 陣して追ふてぞく登りと觸らば駿遠參の軍兵を
 催促ありし二万五千餘騎段々小備へて富士川乃
 西岸小陣をとり又甲州の武田信玄乃許へ使者を
 立らば北條氏康乃不義かくれ如し急ぎ御勢出
 され速に退治あるべしと牒送ありしは信玄も
 富士大宮より馬を出さる
 繪本小弘治三年の春北條氏政氏直父子大軍を
 卒し駿州へ亂入と云ハ甚しき誤なり氏直ハ永

九尾言...
禄五年の誕生あり母ハ信玄の女天文廿三年小
約定あり弘治二年入興あり一姫あり弘治
三年ありも未生以前形り況や富士川合戦氏
直出陣せしむべしや甲州諸士乃家記又ハ甲
陽軍鑑ニ載る處を以て考ふる小この年義元ハ
遠州小打出引馬野ニ陣せしと聞也古きは尾
州乃織田信秀の嫡子上総介信長今年ハ廿一歳
なるべし去天文十六年十四歳の時三州吉原
濱の地へつつか乃勢あり打出焼討せしよを以
降やこそとすは川谷岡崎あつり一乱入せん
氣色をせしが處くに付城を築く今川家の領

分を規つて鎮めんが為なるべし引馬野とい今
味方が原と云
抑北條家乃むりしと尋る小桓武天皇十一代伊豆
四郎時家その子北條遠江守平時政より八代の後
胤相摸守高時入道崇鑑正慶二年五月廿二日新田
小太郎義貞乃為る攻滅され鎌倉葛西谷東勝寺小
於る自害しけしと一族門葉の歴々八百餘人同く
腹搔切て死る多年の恩分み報しは北條九代
の權勢爰ニ滅亡したり
北條家系より桓武天皇葛原親王高見王高望王
良望貞盛と六代を歴る貞盛小男子あり

大月己ノ痛...

三

嫡子維衡ハ平相國清盛公六代の祖なり次男を
 維將ト云伊豆北條の祖なり維將れ子維時その
 子直方夫を源家乃名將八幡太郎新羅三郎の外
 祖父なり直方れ子維方その子時方その子四郎
 大夫時家とあり桓武天皇ハ十二代なり叔又
 時政乃長男義時その嫡子泰時その長子時氏時
 氏の長男經時早世せしは次男時頼其跡を
 繼そ其子時宗其れ子貞時その子高時入道なり
 時政ハ實ハ八代の孫ふとと執權の次第を
 追小時を經時と五代と數へ時頼を六代と數ふ
 る故ハ高時ハ九代と當たり

高時入道乃次男相摸次郎時行鎌倉を遁して信州
 落行忍びく有るが程那く建武の乱出来り時
 行も一方の大將と立ちし軍利なく打負あり
 かくこと隠しけし時を待てるに新田足利の確執
 ありこと互に天子を奉り勅定と云院宣と稱し皇統
 終に二つに分る南朝北朝と云是あり南朝と云後
 醍醐後村上後龜山の三代と云大和乃吉野の内裏
 御座あり故あり吉野を今の京より南に當る
 今北京より持明院乃法皇の御流あり皇統を續せ
 ぬ今今の京ハ吉野より北に當るを以て北朝と云
 南朝乃忠臣楠正成卿ハ攝州湊川に自殺し新田左

中將義貞卿越前足羽に於て流矢小當りて亡命し
 去る後南朝の官軍次第に微弱にありしかば先亡
 乃餘類たちまち小恩免を蒙りて御味方小馳加る
 々々小相摸次郎時行も北國に於て旗を揚北畠顯
 家卿に相從くとも小鎌倉小攻入尊氏乃嫡子義詮
 を追落を然りと云て京都を尊氏の勢強く
 て北畠顯家卿も泉州阿倍野に討死あり
 曆應元年五月廿二日鎮守府將軍陸奥守顯家戰
 死行年廿一歳なり義貞卿越前足羽に於て流矢に
 當り自刎し去るに閏七月二日相摸次郎時
 行乃官方小使者を獻して勅免を蒙りしに延元

元年十二月廿一日吉野臨幸の後延元二年十二
 月鎌倉合戦乃前ふとばあさる謂こを後前後聊
 う錯乱を
 又後醍醐天皇第七乃宮奥州の將軍とて御下向
 あるべしとて伊勢國より出船すし海に漂はる伊
 豆國三崎の沖に難風に逢船こぼれく漂没せし
 が宮乃御船を伊勢國篠嶋小著
 篠嶋ハ尾張國知多郡幡豆崎乃南一里許小あり
 相めぐり三里民家頗豊饒なりと云上古ハ伊勢國
 度會郡小屬せしが文禄年中豊太閤の仰にりて
 尾州海西郡長島を伊勢小屬せし免篠嶋を尾張

小附と云但神鳳抄と志摩國答志郡篠島と
 あまの御船の頃志州小屬と云
 時行も御船に供奉せしが辛く志く伊勢國安濃津
 小吹寄られたる命をかりに助うりし味方
 乃行衛も志く伊勢國奥州下向も叶ふぬは是非なく勢
 州に止りし世を忍び居たりけふが志く縁と
 て語らひたる女乃腹に男子を設けし北條嫡と
 乃惣領あまの世成り勢州の出生なれば
 とく伊勢小次郎行氏と名のせむる
 流布本時長小作る今按小田原北條の系圖異
 本小時行乃男と伊勢小次郎行氏と云や乃子と

小三郎時盛その子と新三郎行長やの子即新九
 郎長氏なりと云り又伊豆國田中氏系圖小の時
 行乃長子と北條小四郎輝時と云その弟と北條
 小次郎行氏と云横井氏乃祖と云又横井系圖よ
 り行氏或る平太郎時満と云母を熱田大宮司女
 なり時満尾州蟬江小住を時満北五男平五郎時
 任愛智郡横井村より移り住し終に横井氏を稱を
 と云也
 行長より四代乃孫伊勢駿河守照康長享元年九月
 江州佐々木高頼の味方と取りけし高頼敗北の
 後甲賀山小遁と追討乃難を避てり

長亨元年九月十二日 常徳院將軍家江州御進發
こして京都御首途ありけし越前國よて朝倉
孝景御味方馳加らんと坂本乃御陣へ参着せ
六角高頼觀音寺城を落し甲賀の山中遁り
由江州御陣記に云佐々木六角高頼と云佐
々木源三秀義乃長子太郎左衛門尉定綱の四男
四郎左衛門尉信綱の三男壹岐守泰綱乃三男左
衛門尉時信と云々京都六角小館にて居依り
此を六角乃佐々木と云時信は長子氏頼と其子
満高まづい京都將軍家小暱近せし満高乃長
子満綱以来在國して幕府に祇承をさざりぬり

満綱文安三年正月廿三日近江國威徳院より自
害しその子久頼康正二年十月二日卒し高頼家
督し六角四郎と稱し後小膳大夫の官を中
けしとて参内もせし氣隨は在國するを不當之
とて將軍進發ありしあり
駿河守照康の長子新九郎氏長ハ駿河國へ下向を
然るに氏長一人乃妹あり美人の聞えありしハ
ハ今川修理大夫氏親とて妻とぬし寵愛をなす
厚りけふに依り新九郎氏長も興國寺の城主と
ありしあり
新九郎氏長ハ永享四年壬子乃誕生なり康正一

年駿河小来り氏親より従より小氏親富士郡下方庄と
與より興國寺城主とよりたり時より氏長廿五歳
なり長祿二年より並山より移よりと云北條家譜別本然らハ文
明八年四月六日遠州塩見坂より今川治部大輔
義忠討死より時より氏長すより並山城主よりて四
十五歳なり長亨元年九月常德院將軍家江州陣
の時ハ氏長五十六歳よりあやよりむより又小田
原北條五代記よりハ伊勢守殿子息駿河守照康と
名付照康の嫡男太郎貞次二男新九郎氏茂と號
二人の子息より也此説より伊勢系圖より合よりせ
考よりハ駿河守照康より駿河守貞雅よりの法名照

安を照康と誤より形より貞雅と因幡守貞長
乃四男より又同書より今川氏親ハ新九郎ため小
叔母より夫よりたりとより然よりハ貞長乃女氏親より配
せよりと聞よりゆ然よりども系圖より載よりハより輒より信より
難より且貞長の女より氏親の卒より大永六
年より九十三歳より過より貞長永享六氏親と年齢
配當より疑よりハ系圖より氏長乃妹義忠の室より
氏親の母より即北川殿より是より
氏長小伴より下より侍より荒木兵庫頭多米權兵衛山
中屏四郎荒川又次郎大導寺太郎在竹右兵衛尉と
六人ありいより也より智勇兼備より者より戦場より

大岡己刀編卷五

趣く度む小勲功を何と云ふと云ふは是に依
り氏親もまもり親しく悦び合ふ懇情を盡されて
り爰に此項伊豆國北條は足利左兵衛督政知と
中關東乃大將軍より海を世あは堀越殿と號し
尊敬かぶりぬ

伊豆志稿は堀越御所は田方郡北條の西八幡山
の北今畠とあり御所内と稱す水道を越へ西へ
依り堀越と云

此政知と申は足利六代乃將軍普廣院義教公乃三
男よりて東山義政公の舍弟なり

南朝紀傳小長祿元年九月廿六日香嚴院還俗左

馬頭は任し政知と稱す廿二歳堀越は下向しぬ
と云ふ尊卑分脈圖より長祿元年十二月廿一日
還俗とありこゝは鎌倉の持氏卿滅亡の後關東
は大将かく諸將氣隨となり治り難しとて持氏
卿の末子成氏朝臣を取立り鎌倉ふる返しけ
る成氏朝臣結句上杉は父兄の仇なりとて是
を誅せしれしはその方様乃人々互に引分
黨成結びし合戦やむ時あり依り京都將軍の連
枝と一人下せし

去康正二年關東乃武士輩より東山殿へ申旨ありし
は依り豆州は下向せしれし然るは延徳三年

大月己の病末

四月左兵衛督政知卿病よつ卒去あり

去延徳二年政知朝臣從三位了叙し五ひ今年四

月五日薨御五十七歳勝幢院九山 公と云と有

鎌倉大日記より四月三日薨四月廿六日三島川

原谷寶鏡院小葬ると伊豆志稿より記より政知卿

乃長男茶々丸二男ハ京都將軍義澄卿ありその

始末長々ババと略ハ

世繼定まらばておの家政務大小みどはくと云

ども兩上杉ハ自國乃合戦より堀越の乱を治

むるよ及む此時新九郎氏長興國寺乃城不在

堀越の有様ありびよ伊豆の國ハ風儀をうめひ

熟おひひかハ伊豆國北條ハ先祖の舊領なり我

正しく北條の後胤おととも氏を隠して世の中を

徘徊する近頃無念と云ハ今既よ四海乱也

王威も武威も振ふとる強さを發り弱さハ亡

ふ時節ありいりあもして豆州を攻取先祖乃舊地

立歸り北條氏とあはさむやと思案して氏

親小軍兵を請り明應元年のたる不意に豆州へ押

寄堀越殿成責落しその勢小乗る國中を打ふびけ

その身北條に住しとるかふ處もる北條氏長入

道早雲と號しけり

早雲寺入道伊豆乱入乃年紀數説あをとも爰よ

略と一説小氏長の母ハ伊豆國田方郡桑原村の
田中氏なりこの田中氏すなわち相模次郎時行
の子孫なりと云又ハ氏長の妻なりとも云
と云れども関東山内の上杉顯定扇谷乃上杉定正
と云累代の大名あり相州武州上州越後を領して
其の勢強大あり氏長入道赤とを敵と受つとい今
川家小背乃常小旗下に加はり軍勞を厭ふ
明應三年三月箱根を打と相州に攻入小田原城
を攻取

大森系圖小田原城主大森信濃守氏頼明應三
年八月廿六日小田原小於死とあり然とは小

田原落城の日自殺せしありん
無雙の要害をばあれを居城と稱して楯籠り上
杉と追崩して大威成振ひいゝもあぬぬ
相州一國を斬從へ豆相の兵を擁し勢力を
強大ありしは始り自立乃色成顯々今川小
從乃氏親大に怒り早雲を攻んと軍兵を催を由
と聞早雲すやりに使者成立ち和議を請ひつ
讒者の實否を糾明して兩家水魚のありひをか
駿豆無事小なりしを明應四年夏五月早雲入道
子息氏綱乃九歳あるを伴ひ武州に打て出品川
小於上杉朝興と合戦しあをふらちられ宇田

川和泉守とてめ武州侍降参したり其のち永
 正元年九月上杉顯定上杉朝良武州立河原小於
 合戦あり早雲こを時とて度々武州へ打出數
 郡を切取と云とも北條開運の時節至ると見え
 てあつと拒ぐ者かく同九年八月十三日三浦介義
 同入道導寸の相州岡崎城を攻落し鎌倉へ打入同
 十五年七月十一日三浦荒井城へ押寄て導寸父子
 を攻亡し十分小勝利を全くし十六年八月十五日
 早雲入道行年八十八歳おし小田原城を卒湯
 本に葬りすむら早雲寺殿天岳瑞公大居士と云
 湯本金湯山早雲寺今猶存を臨濟宗あり天文十

一年氏康の請よ依く當寺為勅願淨刹至佛法紹
 隆宜奉祈皇家再興者天氣如此仍執達如件天文
 十一年六月廿四日左大弁為 早雲寺大隆禪師
 禪室と云綸旨北條五代記不見えたり
 早雲乃嫡子左京大夫氏綱三十三歳おして家督
 弥威を振ひくるにより氏親大に憤り駿豆乃和睦
 屬ぶんとせし氏綱もさへ近親といひ早雲
 寺入道のむりを思ひ出せば等閑とてさふ非
 むとて再度和親の約成堅くかゝるなり
 甲州木立妙法寺此古記に大永五年新九郎より
 千貫文府中へ進上和睦とある此時あるべし

大永六年六月廿三日今川氏親卒一嫡子五郎氏輝
十四歳ありて家督に

氏親乃母北川殿と云ハ氏綱の叔母あり氏親の
室家ハ中御門權大納言宣胤卿の女なり氏親乃
法名を増善寺と云

大のころ氏綱四十歳聞ある勇將乃くを那とば人
と人ともありて世をせとあさづ心の隨小振
舞々ありど小氏輝うし治めざしとい思へども又
すべさ様も那くて過しけらよ天文五年四月十七
日氏輝廿四歳あり早世を氏綱の嫡子新九郎氏康
天文六年七月十五日父氏綱と共に武州川越城よ

抑よせ上杉朝定上杉憲政の八萬餘騎を氏康生
年廿三歳八千餘人と共に夜討して忽よこと成追
かよ川越城を取る氏綱あよ居る朝定辛くし
て松山城よ落行しが氏康をささづ攻寄られバこ
をも遂小攻落され上杉憲政と共に上州さして落
行ぬめり後武州平均よ氏綱乃旗下と那り
其の勢をうや関東八州よ及ぶり

川越夜軍流布本に天文七年八月とい今北條五
代記よ従ふ此時上杉朝定十三歳憲政十四歳之
今川家ありハ氏輝早世して子息なきたが舎弟二
人あり一人を律宗遍照光寺弟子あり良真と云一

人の瀬戸乃禪德寺默堂和尚の弟子あり喝食の躰
 をととも是ハ氏輝同母兄弟なり天文五年ハ十八
 歳あり氏輝遺言により還俗して今川五郎義元と
 云父兄ハ生也増す智勇兼備の大將あり
 流布本此段事實錯乱によりて別本ハ依て訂正
 東海道十五國の軍兵を引卒し天下ハ亂を切鎮め
 上洛して京都將軍家乃政務弼補佐をなさんと朝暮
 抱ひひめくしけふハ北條と不快ありハ大議成
 就ふハ難しと思惟して氏綱氏康と親しく交し
 々々ハ兩家の間ハ奸佞の邪臣あり互ハ互ハ讒言
 を構へくるほとハ北條今川乃間が睦しあはば

天文十年七月十九日氏綱卒し氏康廿七歳あり家
 を繼父祖よおとくぬ勇將あるうハ早雲以来既ハ
 三代乃武威を輝り伊豆相摸武藏下総上総大半
 切從へあとも上洛して天下ハ旗を立てやと思ひ
 きてつをりて駿州まで乱入せりなり氏康の軍勢
 四万餘騎富士川北東ハ陣を取バ義元の二万五千
 餘騎川西ハ陣をとりて兩方名ある侍多々れバ容
 易ハ軍をとりて川隔て見合居と
 見合居

此年氏康四十歳義元三十六歳あり智謀武略共
 半牛角の將帥なり

今川北條富士川合戦乃事

并藤吉郎初陣高名の事

今川治部大輔義元旗本此諸士を集め軍評定有て
まづ手分をぞあたりたる先陣ハ朝比奈備中守
泰次三千餘騎川を隔つると二町餘西の方小備を
たつ

朝比奈右兵衛大夫泰熙乃長男あり遠州掛川の

城主あり今川分限帳二万六千石と云也

二陣ハ飯尾豊前守連龍

遠州引馬野城主なり分限帳小濱名一万六千石

と見也系圖小連龍の父を豊前守乗連と云

三陣ハ惣大將義元自身壹万二千餘騎を率し庵原

右近信氏

系圖ハ庵原安房守忠胤乃三男あり分限帳小右

近大夫二千二百石と云也

温井藏人富永伯耆守関口越中守井伊肥後守直親

江口左京亮等と左右の二翼として段々小備らる

處へ松下源太左衛門尉長則嫡子嘉兵衛尉之綱著

陣ハ義元松下小荷駄を奉行とべき由を定らる

甲陽軍鑑ハ天文廿三年甲寅の春駿河義元相州

の氏康取合の時義元より信玄を頼み子細ハ

尾州乃侍大將織田彈正忠死して其子息今の信

長形り義元乃旗下にありて結句義元の持の國
 三河の内吉良の城へ取掛付城とて是を攻る
 義元馬を出しあぐも跡を機遣ひ遠州引馬と
 逗留せしむ先衆を以て彈正忠子息の拵居と
 不若を攻殺と處に織田降参して父乃如く義元
 へ逆儀有まじきと起請をせし他言中付義元
 と信長無事あるを尾州侍笠寺の新左衛門取扱
 と依り形りと云は此時義元遠州小出馬して有
 しが氏康出張と聞て引返せし故に松下小駄餉
 を命ぜしと聞也
 松下ハ先陣とておとまりひつるに後陣は在る兵

糧を奉行を思ひ乃外なきども將為りて形く
 去らるるおの指揮お従ふ小荷駄を奉行とて長
 則之綱お従ひ来りて遠州侍の内は拔掛せん心
 懸し者共を戒めしめふ大軍は合戦お初陣の者
 狼りお走向ひ討死しけしを誰かは證人にも立べ
 さ唯よく陣中の役所とて固めし音あせおと下知
 ちくたり諸又北條方の先陣ハ伊藤日向守二陣を
 大導寺駿河守三陣ハ松田隼人後尾張おのく軍
 兵五千餘人を帥ひしり打寄て評定しけふハ如斯
 大軍大河城をたてて睨居しその詮るに速に川を
 渡し今川勢を追拂ふべしとて伊藤日向守真先お

河に打寄たり坂東武者の習ひとて死生を去るべ
 敵を見あむとて短兵急よ川に打入息をも繼せど
 おいつて先陣の今川勢を突崩せよやと云儘に
 五千餘騎一ませもをばさつと河へ馳入浪を蹴立
 らぬもまをさつ朝比奈備中守あをを見よ三千餘
 騎を三ひよさけ正面を備中守千餘騎よて走向
 但五百餘騎ハ鎗を取ら鞍強よかけつてよ残る五
 百餘騎を馬を乗らふ折敷て敵を待て突立べ
 左乃千騎と右の千騎とい弓鉄炮を打つて敵の陰
 に扣居ら相圖を待て鉄炮を打つて敵の色合を見
 て弓を射べと備中守た静まりかつて待たふ

日向守り五千餘騎富士川を渡りやいな今川勢ふ
 突かふ朝比奈り五百餘人の歩行武者面も振ど
 鎗の穂先をやらつて突立をい伊藤り先手の馬武
 者ども立足をどらよ色めく處を見を備中守
 時分はよと左右の伏兵を起し鉄炮を打つて烟
 の下より精兵の射手をそろつて雨の降如く射さ
 せしうば日向守り勢思ひの外に打立らる川端を
 さして敗軍に
 繪本あも備中守勢を四手小分と記せり
 日向守あをを見よさか者共敵を味方ふ比ぶ
 色バ思の外に小勢あるを馬強あるとの真表に進

大目己の編巻五

一七

て駈倒せやと下知れば伊藤が兵士千餘騎響を
あつづき駈むうし朝比奈が五百餘人馬武者は駈
なやまされく右往左往と敗走に備中守かくと見
より我を越や兵共と大音聲は呼くをけり馬を進
むきは大將は先と打を何面目の生延ん死や人々
と同音はゆめを叫んぐ五百餘騎大山の崩る如
く駈たけき伊藤が兵ども一支もはくえは崩れ
きの日向守味方をとげま返しと下知を共
耳も更は聞入ぞ引くゆく伊藤も今の為んく
はさ退く士卒を先へ渡さんと踏止り追来る敵を
待く一軍しつる川の瀬踏させて静小引べいと

堤の陰は扣へく此時藤吉郎高吉は松下小從
出陣せしむ松小荷駄の奉行もは手
乃者戦場は出るもは藤吉郎は手
志く先手は加く一働させやとありく松
下は備立嚴重しすき間あけはいたるを
さ様も如何せんと思案し急度工夫を廻ら
飯櫃は携へ東陣の兵糧なりと高聲は呼を
い松下は陣所を出るやいなや飯櫃を投棄て
飛が如く小走行を見合戦い半ありく北
條方負色は見えく大勢は敗卒たやすく一所
は退ぐく分散してを渡らん然らば富士川

の岸ふかくわく現ひる品よは高名手柄もなる
 づきものど獨笑して川端より行藤吉郎ハ初
 陣なうろ合戦の様を察し敵の退く處を討んと思
 ふ志實も凡人みくハ無きけり藤吉郎堤の陰を見
 るハ大将とくえて馬物具さるやうな鎧あつる武
 者一騎馬を西より引向う手綱かいらり休ひ居り
 たるハ伊藤日向守味方の敗軍を心あがり小落し
 たり又朝比奈ころまぐ付たるころ踏止めて手痛
 く軍せむやとて扣へり朝比奈元より軍法よ
 鍛錬せしうバ速に人數を引あげ長追させ味
 方勝軍ハ志ころり木の上より追駈るを窮鼠却て猫を

嚙の理めく北條勢逃とざるを知り必死とあり大
 返しより引くさば敵ハ大勢なり味方ハ小勢なり
 忽ち敗軍に及ぶる殊更此勢のそあり後陣
 の新テ大勢おきさらば戦つとも難儀とるべし
 敵ハ追とばとも引取口の難儀を忘るす味方
 を勝る胃の緒とめ勢を得るす盛あつると
 思案して長追させ北條方ハ虎口を遁と此隙よ
 川と渡らんと我先より押さる東の岸小扣へり二
 陣乃味方これをみり救ふんとする敗軍の味方
 あつてあさめさ込るころりほどよ心あつて見合
 居り援けえば斯る騒ぎふ紛る藤吉郎ハ敵の勢

の中小走り入是より三町程下の浅瀬あり然も
敵ふけをバ渡りゑとさる早く彼處を渡りぬくや
と呼たりく走りぬくは伊藤とて我聞か實りと
やおのひらん從者二三人引具一堤はさひは川下
へと歩ませ行藤吉郎ハ伊藤が川下へ行をきて猿
ぐりてろ走行藪の志げさよかたれく伺ふは伊藤
が從者二三人ハ瀬ふとせんとも川へ打入日向守
只一人何心もかく馬と立居るを見すまは藤吉
郎藪の中より這出て伊藤が乗たる馬の太腹をぐ
さと突はりれく馬ハ刎上る主ハ真倒れぬと落
郎等こといと駈寄所を藤吉郎すろさば拔打切

倒し進て伊藤を取るかさ鎧の透間を突通は日
向ハ聞ゆる大勇士なり手負かぐも藤吉郎を搔
扱に刎返り取り押えり共馬より落し時帯せ
太刀を脱し短刀を抜失て無きば討づき便
もかく何者ぞと尋ぬは藤吉郎汝を討んとさる
敵なりと云日向守怒り憎さ云條うを推殺て棄ん
と云つゝ壓かきさるふ如何ふらん伊藤が
腕緩も自然と倒れけしを藤吉郎得たりと立上り
終り伊藤が首を討落を

伊藤日向守ハ伊藤兵庫助父と云兵庫助ハ北
條五代記ハ伊藤兵庫助と中て馬鍛錬の勇士有

或時口すさびる大旗や大立物よほよき馬好ま
人も不覺なるべしと詠はとある人なり又一本
ふい伊藤日向守その子備後守や乃子兵庫助そ
乃弟右馬允ともいふ

たはこを凡人あつぬ藤吉郎が初陣の高名あり
あつる山王擁護の御まかすを加えらるるあり
愈々と叔も彼瀬踏きし郎等ども川中あつ此躰を
見るより引返し藤吉郎又討りくふと前後左右
より引うけて戦居り松下が陣より藤吉郎が兵糧
を擔げ出し後立歸らぬ戰場へ行し形も討せ
ては不便なり引立歸らんと之綱たぐ一騎馳著る

これハ藤吉郎敵二人と火花を散して追つま
すさ酒も形し之綱鐘をとりあつ敵一人を突伏
すは藤吉郎も踏込終に敵死切らせ伊藤が首
を松下にをくれハ之綱大さふ感嘆し始終を聞
くいざけらむ大將の實檢ふ入べしと本陣へ参
上を

重修真書太閤記初編卷之五終

重修真書太閤記初卷之六

藤吉郎松下が危急を援ふ事

并今川北條和平の事

今川義元いまがわ よしもとの先陣せんじんの軍味いさごころ方勝利かちを得え敵敗北てきまへ北きた比ひらら初はつめての合戦あつせん小勝せうしょうする心こころ地ちよよと勇いさえ悦よろこび朝あさ比ひ奈備中守なびなちゆうしゅが軍功ぐんこうを賞美しょうびふくむ處ところへ松下まつした之綱のつな北條家きたじょうけの勇臣ゆうしん先陣せんじん乃大將たいうしやう伊藤日向守いとうひなたむしが首くびを持来もちきこり實檢じつけんよそかへんと本陣ほんじん小入せういりく申次まうしつぎを尋ねたづねの始末しまつを言上ごんじやうす

今川義元いまがわ よしもとの本陣ほんじん此時このとき遠州ゑんしゅう見付臺みつけたいなりと甲陽軍鑑かうやうぐんかんふも也見附臺みつけたいより富士川ふじがわ西岸さいがん岩淵いわぶちまで廿四里にじゅうよんり十七町じゅうしちまち

を隔り抄の間は甕の坂甕乃橋佐世の中山日坂金谷坂
大井川宇都乃屋坂安部川薩埵峠吹上の松原等の路
程を經へ蓋實檢の為小松下之綱をよび藤吉郎本陣へ
引返せしと聞ゆ

義元松下と呼子細を尋らむれば之綱が云く某が家
来は中村藤吉郎と申者やうく働て伊藤を討取その外
伊藤が郎等二人を討捨く其父の長則は後陣小在る
兵糧の指揮を承たる役をていへば手乃者ども小申渡拔掛の
働を嚴重小戒めていふが藤吉郎は輕き下部の身と申初陣
し何乃差別辨もなき軍の次第を見物なり度由ふく
只一人戰場は赴きしと告る者のいひ故某まかり越引

立かへらんと存跡を慕くもせ行尋る處は富士川堤
小於る日向守をばちや打捕その郎等とたうひて罷り
在即とせ付く見いへば郎等をも打果していと申義元
おどろき甘心し伊藤は然も名高き勇士あるものを容易
く打捕しと天晴の手柄なり味方勝軍せしと云のこゝろは
敵の大將一人うち取り快きこと云計か氏康はさぞや
無念ふおのりらめ一益は多し氣味よきことと大悦び
藤吉郎を呼出せしとて呼出さるる藤吉郎松下が座
の末は平伏して義元たるか藤吉郎の顔色容儀を見玉
ひ實も武士の心の勇と專とるをべしか若輩と云小兵
あり然も名譽は勇士を討取りし唯智謀と心の勇ふ

よきより末たのりき壯士ありよく扶持を加ふべし但容
兒いまことと猿に似たりと稱美せしむるは追てきあぐ
乃賞もなし

軍中の賞罰を以て勇士を進退せしむるは古乃法あり
軍防今も斬首五級以上は上勲とて四級以下を次勲
と爲ると云ふは是あり漢楚乃合戦は項羽の首を以て千戸侯
小も募るありんと云武田家の兵士を賞せしむるは甲首
采幣首の差あり伊藤の首は采幣首あり最賞翫あ
るべし小はもなきは抜掛の罰を加えざる為と聞ゆ軍
令を主とする人心付べし處あり

松下も面目を施して且二の合戦の先手小向しんと望し

義元ころよく諾ひて即先手の備少を組合せしむるは之
綱大も喜び飯尾豊前守が手小加し先鋒にせしむ朝比奈
備中守の初度の合戦は打勝しあどもその手は兵士手を推
ひて戦ひしうは暫く休息せしむべしとて二乃合戦を飯尾
小讓て我身いとの次は備えし味方の威を助く北條方
も先陣敗れし伊藤日向守討せしやうく残る士卒を集
め本陣へ引返ししれは氏康大に怒り自身川を渡して戦ふ
べしと馬を進めしむるは老臣共々せ聚り響づしを引し
めし諫めしむるは味方大勢と云どもあしむるは不知案内乃
敵國なりあしむるは大川を打渡して必死の地勢あり七分を
危し戦ひあり能く思慮成廻しやしむるはあしむるは氏康

聞く敵地を恐る大川を嫌む争て人の國を襲ふことを
得んや宇治川の如くもや瀬も渡りて勝利を得
ざるも和漢古今此合戦の先蹤を思ふ川を隔て一軍を
渡せ一方は必ず利あり

孫子乃九地篇小敵の地に入て深く味方の城邑を背する
多きもの重地といふ深く重地に入て心志專一主人自ら
散地は居る克あはざる理なりとあるを思ふ
矧我此國を切取んと打向ひし身の大川は恐る合戦せどん
ば出陣の甲斐あり殊は味方の先陣利を失ひぬ再度渡るは
ん北條乃名折る敵を恐るは似たり二陣の輩もかく渡
りて合戦を始めも我も跡より續くべしと下知する處へ士卒

走り歸りて伊藤日向守討死せし由を告たりしは氏康
大に驚きわ惜む憤り大音揚り急げくと下知し
るれば二陣の大將大導寺駿河守間宮豊前守一手ふるて
即時は川を押して

大導寺駿河守は北條早雲と共に下向せし大導寺太郎
の子あり但大導寺と云氏は息長宿禰の沼田太郎資
繼乃二男硯田二郎資里の二男資曠の男資磐とめ
大導寺と称せしや間宮豊前守は宇多源氏あり佐々
木左近將監成頼十代間宮孫太郎信景の曾孫新左門
尉信冬とめし小田原の大森頼明は從て相州粕谷五百
石を領せし信冬の曾孫左衛門尉信武の時浪人せし

と北條早雲懇々招きしは子息豊前守信高とて
 早雲は仕む信高の長男好高即ちまの豊前守なり
 北條勢は七千余騎荒手ふるうも先敗の耻辱と雪ぎうけ
 伊藤り弔ふとふへんと勇氣凜々として今川方飯尾豊前守
 朝比奈備中守が備と目よかけ切くるふ大導寺間宮大音
 聲小先の合戦は味方打負し備まざる小して味方乃大
 勢一致せざるはなかり今度の備とくびさば味方志を一ひ小
 るし進めて戦ふべし今川勢切崩さば一足も引もの
 なり永き弓箭の瑕瑾とおひふべしかきとや兵すめや物
 共と諸士を上げまし攻まりたり今川方の大將飯尾朝
 比奈をれをみるおるどく二手小そるつて敵をまひ両

陣をて小寄合あり鉄炮をうちけ烟の下よりさやをみ
 若しの鏑とむねひて突かざる
 北條家乃備とて五十騎一備の法あり士大將一騎組頭
 二騎士五十騎弓足輕大將一騎弓足輕五十人鉄炮足
 輕大將一騎鉄炮足輕五十人長柄奉行二騎長柄足輕五十
 人旗奉行二騎旗七本貝太鼓使番四騎とて馬百足人
 六百四十四人の割あれば七千人の五十騎備十組と知べし
 間宮豊前守好高の組下に伊藤弥助と云ものあり是は先
 討とて伊藤日向守が甥なりし叔父乃弔合戦して
 供養は備へりやとおひひ真先小進く戦ひたるが元來武
 勇すぐれし今度の合戦も我身以上の耻辱とする向ふ

敵三騎と突おこしあつりと拂く振舞々れは今川方の飯尾
豊前守が先鋒小松下嘉兵衛之綱馬と飛きて弥助と鎧を
合も弥助ハ寶藏院の鎧と手練せし者まで得たる所の鎧を
以て秘術と盡し戦ひたり

寶藏院胤榮法印弘治三年ハ三十七歳ありいまだ鎧術
以て世小鳴よいらは伊藤弥助との流乃鎧を手練せしと云
と疑ふべし松下之綱ハ廿歳の時あり

松下も鎧術の達人少くたぐひは劣らぬ名譽の勇士火水小
るつゝ突合々るは伊藤が鍵鎧松下の鎧より引かすべし
得たりと踏込かけ倒さんと云は松下こそと云は引かさんと云
と云も毛引の鎧にてあつらにまうせず既に危く云えたる所

藤吉郎はくくと馳より伊藤が鎧の柄を中より丁と切き
たる互に引合けるを切らふと云は伊藤
ハ鎧の石突を以て尻居小働と倒る倒とながう太力をぬん
ととる所へ藤吉郎をせより弥助が脇を柄も徹とはは
たりたり痛手あれを少もすつゝえはう川めは倒しつゝ
松下かけより取く押え終は弥助が首を打たり切先貫き指
上りつゝとて今川がハ聲をあげく悦び北條乃陣よ
ては鳴を去りめく氣を落し今日の軍も負色は見え
りは又大導寺間官士卒をたげし進み戦をいとも日
すでに夕陽及びつと互に軍を引上勝負ハ明日こそ色
代しく相引より退く此時甲斐の武田北士大將山縣三郎兵

衛尉昌景山本勘助晴幸三千餘人にて江尻の驛に打出陣をくらし

山縣三郎兵衛尉昌景四十餘歳山本勘助六十四歳然も入道の後あり但武田家の舊記によれば弘治三年三月十日信玄は上州へ出陣ありしなり

今川武田の親しき中あるふより氏康より態と使者を遣し加勢をたのむり武田信玄思慮ふき大將なまは山縣山本に人數をとく駿州へ出陣せしめ合戦の次第を見く塩合よきより兩陣和平あさむべしと下知せしが故よりかくて駿河相州の軍兵相引ふりしとて今能時分ありしと和平の取結びをなすべしと山本勘助は北條乃陣と

至り山縣三郎兵衛尉は今川の陣に赴きたる小勘助氏康の對面し信玄の口狀を演説する趣は抑今度加勢の儀仰こころにより信玄自分として軍兵を引卒し出陣をばさあともかひなく知せあむと武田今川の両家久しき親族といひなると信玄父信虎義元の許に住して厚く介抱をうけしむる信玄たちも今川小向軍仕ゆたふと正しく父は向く弓箭を取ひるるさなきに信玄は不孝の名を蒙りし猶も罪を重んじんと心安かりし

武田信玄の父信虎天文七年三月九日より駿州府中へ客居し婿今川義元乃介抱をうけし今年まで廿年

よ及ぶり

然しちがう勇士の詮とする處頼を受く出陣せざれば
臆もさよ似くゆ故小人数を出してゆ上ハ明日の合戦武
田家少く一戦の下は切崩し中づき苦よゆどもほりゆく
思案仕るに此合戦無名の軍少く實は無益のこも存トて
ゆ一應の了見と中へるよゆ抑北條家と今川家とい元来
一家の好まてまほせよと世人よゆる處ゆ近比何者の
讒言によりてやくの如く弓箭も及むれやらんその旨ゆ
しく承りたくゆゆ當時北條家の鋒先はよく関東八州
追く太刀風小靡さゆがおりろさふ駿州をも切取んとゆ所
存あゆこれ不義の軍と出ばと云ものう憚多さゆ中條はゆ

とも御祖父早雲寺殿今川氏親の許は牢居あさせゆを
厚き介抱を請らゆゆのそあゆゆ今川家兵士をあり御
身の運を開きあゆると誰ゆ存知のとなりされ早雲寺
殿在世は今川家のためは戦勞をいとたれどこありほほど
その御子孫として早雲寺殿の御心づくと失ひゆゆ今川
家と長く入魂あせられゆ北條家の信義あゆゆま
ゆをたれゆと舉るゆと称美し奉るゆとさゆゆ然るゆ
御先祖早雲寺殿の御心づくと取失あせられ今川を討亡
ゆその國を合せらゆゆの御結構はゆゆたれゆを組
ゆゆとゆゆ又今川家よりゆ成興し北條家をうち亡
さんと御分國一亂入ゆゆとゆゆを拒がせられゆとん

尤當然の如く有り今日の御合戦いりも義小をむき
 道またくひくへいさうも強うり北條家の軍二度まで
 敗走し名ある士もうれくはなり速に御和睦乃取結
 びこそ願うられ信玄いさうも今川を具願しる中
 みをあはれ無名の軍ふ兵士を損トひが笑止と存されだ
 中にい今川家へも右の趣や遣うていへ義元も定
 異儀あるべうべ北條殿御父子此義小從ひ玉をば是
 非なく信玄の道理に付今川家をたきけ軍兵と御陣へ
 すめ有無の勝負を決まべう又北條殿御父子御承知
 乃之義元異儀と申いふ北條殿の御陣ふせくするまで
 もなく今川家の陣頭へせ向ひ義元を討つ棄れべう戦國

の世といふものを不義無名の軍良將の好中とる所とてい
 御返答を承りて信玄も心中で決さんと存めとせうい
 氏康聞て案に相違しはとも勘助がや所その理に當
 る別返答とて言葉もあうりいよやまの今宵休
 息あるべう夜明てい返答い及ぶぐれとて氏康座と
 たんとは時勘助中ける北條今川武田三家乃安危
 存亡この御返答あはれ互は無事の御思慮肝要とい
 と言葉と理と盡して述その夜の北條の陣中小逗留返
 答を相待り氏康諸士大將を集め評定ありたる小
 いづとも口を揃へ計らひけるい只今今川の一家と剛
 敵あき制しあうい處は武田まさ敵を助け戦ひゆる

詮とる處勝利を得て覺ひ去らんよ挨拶よ従ひ
和睦ありと然るべしと一決せしむ勸助を呼て和睦の
義承知のよし誓紙を以て返答あり勸助も又北條家の
返答を悦び即時今川の陣へ赴き又今川陣ゆきと
山縣三郎兵衛尉がゆいひの趣をき義元今度乃合戦
兩度とも勝利のうへと大將分を討取る軍の面目なき
ともあはれは快く和睦の儀を承知し勸助を來るを
まち居し處へ勸助北條の陣より歸り來り氏康と問答
の次第との斯るうへ北條家のと此後更は御氣づひ
あはれは我等も兩方御得心あはれ何もの御陣ふ向
て討死仕るより外あはれは三家の安危たは此時と

と存はめゆひは兩方とも御得心の條某等の身は
あはれ難有御芳志とやせしむは義元も大は悦び翌日氏
康義元富士野におひ和睦の對面あり山縣山本兩陣よ
入るまを計らひ以後別心なく相救ふべき旨盟約せし
和睦すつと調ひ北條父子軍をすまて小田原へ歸陣
ありしかば義元も府中へ馬を入武田の扱ひを厚く禮謝あ
はれ兩人を甲州へくされたり

藤吉郎氏を木下と改る事

并之綱藤吉郎は婦を嫁とる事

今川北條富士川小於合戦勝負いよ決せざる所は
武田の挨拶よ依り忽ち兩家和睦して各歸陣あり今川

家より北條家の勇士と聞えし伊藤日向守その甥弥助
兩人を討捕しのち和睦せし十分の勝なりと義元満足の
あより酒宴を催しし諸士を犒らひ勲功を賞し戦勞小
酬らる諸士もまた萬歳を祝して武功を賀しける中お就て
松下加兵衛尉初度の合戦は伊藤日向守とうち取二の合戦は
伊藤弥助を討し味方第一の手柄と云今川家の威風を盛
あらしめ拔群乃功なりと云五千貫の加増を出し大に
賞翫せしむ

駿州の五千貫と云凡末二百五拾石を得へしや乃法も
一貫乃地の米一石と定めその内より地頭役米五升を出し
公納役米二升と定め地頭役を加恩の給分と爲しと云り

委しし別書あり

松下が功を藤吉郎が手柄あはれども藤吉郎は松下が家臣
形とば松下に加増を賜りしなり藤吉郎は松下より
り恩賞を與ふしと之此時藤吉郎初陣あはれ軍の掛
引進退城の心よかけし走廻り山縣山本兩人和睦乃挨
拶しける時藤吉郎よみて聞ゆる武田の軍師山本勘助入
道道鬼といひいふ形る者よと窺ひしるよ小兵ありし片
足跛あるし片目之山縣三郎兵衛尉昌景は大男たるを
ども兎口あり兩人とも五躰不具みて見あくたれども
名の高きと諸國よかくとるよ何事ぞや人を形よ
よし心の勇氣と智謀よふよつと大名をせよあつては

勘助が如き男あまも名を聞き鬼神の如く恐るゝおれ
とて形も我も小男もて顔色猿に似たりとて猿冠者と
人よ呼ぶとて思へども手足目口ともに閑る処なけ
るい勘助よいまさうぬべーい智謀を磨き天下に名を揚
べー惜むべきい勘助その主を得ば信玄良將あまも父
逐ふの過あり父子の親うけられ大功を立かこゝちも勘助
老より運を開くべき時いさうも我今や卑賤の身あま
どとつら開運の時も有べーとてめめ思ひ付しとて
自然よとてなつる大度とて云へー

山本道鬼ハ太閤ハ長むること四十六歳山縣昌景ハ廿
餘歳の長者あま此兩人を視あまと父師れとて

道鬼が説しところ全く孫子の五事一ハ道と云い兩國の
主孰とて道義ありと察とと云よかるい又魏相が兵義
ある者ハ王たりと云ふも合つる甘心せしむるべー
叔松下ハ暇をよむる遠州濱名の宿所ハ歸り此度の合戦
藤吉郎がさうしきにより不時の加増を得たりとて父子
夫婦あま合る大悦び藤吉郎を踈意あまいりてふ
うもはし恩賞の沙汰もなす漸日數へて嘉兵衛藤吉
郎を呼出し爾此度初陣ハ莫太の功をあまつるを壁京
る小倫あまよい今より我子れとてあまなるとて氏を
譲り與ふべー松下と名乗て永く因を失ふとてあると
せん汝が心ハ何とおりのぞやと尋しうば藤吉郎聞き誠

は辱仰と承るるは志う新参と中匹夫の某御氏を賜
たりおバ傍輩のありとく又諸人の嫉妬もあるべし容易
く御受あしむるは志う御芳志を以て仰出さる
義辭退奉るも又志う多しは某所存を中上たたくは
御承知さしむるは氏を改中べしと云之綱聞く所存と何
事あると問藤吉郎云御氏を有のまゝ拜領仕はく
前に中上し如くおれは願はくは松の字乃偏をのこ用ひ木
下と改め度はは志う公と相あはざる禮も叶ひはん
うと中せしむるは之綱大よかんと云字をぬき君臣相
なはざる禮守り木下と名乗るとい萬事ぬけめらさ
誠心とよろこびいふも汝存念は任まじとありけるふ

より是よ木下藤吉郎と改めしと抑藤吉郎松下
の名字と受さるは深き所存ありてのまゝ松下乃
主たる義元と藤吉郎が心は叶はばたと今度富士川の
合戦は拔群の功を立し上義元歸陣の後我をめし出
賞詞を加わら左もあは食禄衣服の類ありとて出て後
乃勸戒勸むるは左様のこともなくこれと卑賤のもの
あはし詞をさしけら良將と云べき器量あははかて
誰か此人のたえよ力を竭し骨を碎くべき賞罰正し
けふ帷幕の下に勇士堪忍とては松下も又五千貫乃恩
賞を得るを悦びあは我を何の賞もなく名字は
與え子の子の如くせんとい何とぞやめる無法の家小長

大岡己の崩

止るべきにあらず早々他國へ至りよき王と撰んぐ大功
と立んぬのとおひひ立平故松下の氏と譲られ父子の因を
結びぬ大事北前の妨とおひひ故松の字乃公を去んと
いふ形り是けごと松下と立退んとの謎あるを心付ざり
ける之綱が心の底こそを知らかたれ

木下名字を太閤の本氏ふとども宇浪の砌るれば深く
はなれぬあるべし但他人を猶子なり我名字を許
せし瀧口右馬允源泰政池田紀藏人太夫泰貞の子
として池田を称し佐々木五郎義清外祖父瀧谷庄
司重國の子として瀧谷五郎と称せし類のどなる小
違あつど是はそれと品あり我家臣は名字を許せ

しるれ遠く漢の高祖の無學あり劉氏を臣下
と授けしと同く近く北條氏康の寵童福島弁千
世北條をあらへしと類とあらへし太閤の羽柴
筑前守成そのまゝ前田氏小與へ又豊臣姓を諸將と授
けらるしとあらへし又濫觴とあらへし

同年八月下旬藤吉郎松下の代参として秋葉山へ登る
る下向の路次あり三面大黒天の像を得たり濱名は歸り
此由を松下小語をば松下大賞美し或僧は善惡を尋
けし僧の云く大黒天は福神なり是を信するもの千人
乃司とあらへしと云へし三面ふまは三千人の頭となるべき瑞
相と賀しるれが松下も尤のこゝおひひ藤吉郎は此よしと

めぐり随分信心まぎべと勧めけども藤吉郎さの信心
とる身も見えは松下さめく勧めしやを止と成得す
おとを祀り崇めける

太閤大黒天を得らんと天正十年六月二日信長公
御事ありのち姫路より京都をけり攻上らるる
時の云説ありいづ三箇大黒天の傳教大師叡山建
立乃時現る一處と云梵あく摩伽迦羅と云翻譯
名義集よ摩伽と云大の義迦羅と云多積財貨居業
豊盈の義と云り秋葉三尺坊權現の本信濃の國よ
出生し越後國藏王寺にて出家し藏王寺十二坊の
中乃三尺坊と云ふ住持し飛行神通自在を得らんと

大同四年白狐ふのり遠州秋葉山に至り終は此山
よ止まりと云委しく縁起あり

藤吉郎今年廿二歳なり松下ゆれを永く留め置我腹
心とちさんめ娘を乞ふ藤吉郎は嫁をその女れ名を菊
と云十七歳松下家人川村次郎右衛門と云その娘なり
容顔もごとたも智浅くして藤吉郎が形のふくき
を嫌ひ離別せんとありども主命少く嫁をいと形も容
易く出去ともあかしく心は染ぬ月日を送るうち父次
郎右衛門その意をばり夫婦中和せざると年月を以
うちよおのづら中直るともあるべしとおひあはるく
沙汰をもせば棄置くるうちその年もくれく永禄元年

とある春二月今川家の長臣朝比奈備中守
朝比奈備中守泰次は右兵衛大夫泰熙乃長男少く
遠州掛川の城主あり今川家分限帳は二万六千石
を領せしとあるなり

義元の命を以て参遠兩國を巡見し出たるほいで濱名
に至り松下が家小止宿を松下珍膳佳肴を備へて饗
應ありけるあまり軍談及ぶ時は泰次松下小向ひ
云やう足下は軍學兵法小達しぬは定めぬ兵器乃便
不便をも知ぬべし某聞ては織田家にて新製の鎧
あり至る調法ありと云り去年三月富士川合戦は足下の
鎧鎌鎗はけしは頗る難義されしと聞その様の時は尾

張製の鎧徳あまざりと沙汰せり如何知ぬやと問松下聞
くいれどもその製作は聞及ぶるもの物を見れば近日彼
國へ人を遣し件の鎧を購求徳あまざりて手本ありて製せし
と答ふ朝比奈この義尤然るべし早に取寄せよと申松下
手を拍り藤吉郎を呼出し今まで心付ざりしぞか
汝の本國尾州の新製鎧いふある造りよやあまざりと問
む藤吉郎答ふるやうそれ普通の桶縁胴丸よりいれ
品替り右の脇あまざりメ屈伸自由小せしもの形と云
松下云く汝が故郷のこゝろは速に彼地へ赴きその鎧
一領求めよと云るべし不日お發足せよと定めたりける

